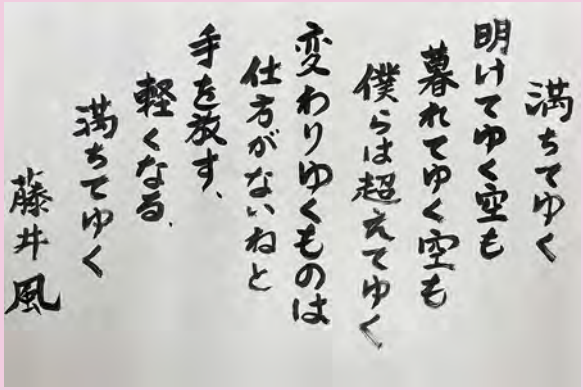
實相寺花園会報

令和六年
四月一日発行
発行所
臨済宗妙心寺派
陽明山　實相寺
實相寺花園会
〒761-0450
高松市三谷町
1811番地1
TEL087－889－3838
編集発行人
山本文匡
https://www.jissouji.net
第180号

お寺の掲示板



唐時代の禅僧、趙州和尚（じょうしゅう）に「放下著（ほうげじゃく）」という言葉があります。迷いも悟りも全ての執着を「捨て去ってしまえ」という意味です。

3月15日に発表された藤井風さんの新曲はまさにこの「放下著」の心が端的に歌われている曲だと感じました。下手な法話よりも、余程「生命のあり様」＝仏心がどういうものか、よく判る気がします。

得られないのかも知れません。

当時は反発した母の言葉も、表面的な言葉だけでは推し量れないものがあります。なかなか素直になれない親子関係でしたが、おかげさまで平成十七年に母が亡くなる二日前、病室に泊まった私は母に、「私を生んでくれてありがとう。貴方の息子で良かった」と御礼を言うことが出来ました。母が喜んでくれたのは言うまでもありません。

これからも私は葛藤を抱えて生きていくのでしょうが、しっかりと自分自身と向き合っていきたいと思います。それが私の「法門無量請願学」なのです。

「学んで気づいて」

本年度の花園会推進テーマは

「おかげさま　学んで気づいて

法門無量誓願学」です。

一般的に「仏の教えは数え切れないほど沢山あるけれども誓ってこれを学ぶ」と解される「法門無量請願学」ですが、年度テーマにも「学んで気づいて」とあるように、それは必ずしも外部の知識を学得することだけではないようです。

道元禅師の『正法眼蔵』「葛藤」に次のような一節があります。

「おほよそ諸聖ともに葛藤の根源を截断する参学に趣向すといへども、葛藤をもて葛藤をきるを截断といふと参学せず、葛藤をもて葛藤をまつふとしらず。いかにいはんや葛藤をもて葛藤に嗣続することをしらんや。」

「葛藤」を『大辞林』で調べると「もつれあう葛や藤の意から　①人と人とが譲ることなく対立すること。争い。もつれ。②心の中に相反する欲求が同時に起こり、そのどちらを選ぶか迷うこと。③禅宗で、解きがたい語句・公案、また問答工夫の意。」とあります。

つまり道元禅師は「ほとんど人は迷いを断ち切る為に学ぼうとするが、迷いを以て迷いを切ることや、迷いを以て迷いを纏うことを知らない。ましてや迷いを以て迷いを嗣ぐなどとは知る由もない」といっているのです。

この葛藤とは、禅的には「己事究明（自分は何の為に生まれてきたのかという問い）」に他なりません。私自身、今年還暦を迎えましたが、振り帰れば常にこの問いが自分の人生を衝き動かしてきたと感じています。

子供の頃から「寺の子」と友達に揶揄され、小僧に出された中学時代は悶々とした日を過ごしながらも、大学卒業後、特にやりたい仕事もなく、何となく入門した禅道場から逃げ帰った私に母が告げたのは、「そんなつもりで貴方を育てた訳じゃない」でした。

仕方なく「これも因縁」と観念し、以来、「どうせやるなら精一杯自分らしくやろう」という気持ちで取り組んできましたが、何かしら壁にぶつかると心は揺れ動きます。けして「スカッと晴れやかに」とはいかないのです。

ただ、せめてもの救いは、時折新しい発見があることです。それは誰かの思いであったり、自分自身の気持ちであったりと様々ですが、「あーそうだったのか」という気づきを得られた時はとても嬉しく思います。大袈裟ですが、「生きていて良かった」と思うこともあります。恐らくは、その時々に自分が抱えている問題ときちんと向き合わないと、そうした気づきは